

脳神経科学（脳科学ではありません！）

<https://l-hospitalier.github.io>

2017.2

スペインはドン・キホーテ、ファリャやロルカ、そしてカハールとオルテガの国。以前は神経系は全身に網のように広がっているものと考えていた。

ラモン・イ・カハールはゴルジ（伊）の開発した（銀）染色法で神経を染め

ニューロン説を提唱（1906、ノーベル賞）。彼はニューロンと①アストロ

サイトを記載、弟子のP.R.オルテガが②オリゴデンドロ

グリア（サイト）と③ミクログリアを発見。ニューロン

以外はグリア細胞と呼ばれる。【アストロサイト】星状膠

細胞。一方の脚を血管に、他方をニューロンに接する。脳

の毛細血管は末梢と異なり血管内皮細胞の間隙がないので

脳神経細胞（ニューロン）への物質輸送はアストロサイト

が行い、脳血液関門（blood brain barrier）と呼ぶ機能をは

たす。アルコールやアセト

ンなどの低分子以外は血中

の物質は無差別に神経細胞

に到達しない。グリア細胞

はGABAによる抑制系やシ

ナプス（神経接合部）の受容

体刺激物質の輸送と除去も

担当、ブドウ糖や電解質の調

節も行いトランスポーター

として機能する。【オリゴ

デンドログリア（サイト）】

の重要な働きは2~30の軸索に絶縁テープのように巻き付く髄鞘（ミエリン、シュワン細胞と呼ばれる）を作ること、訓練と学習により音楽家の脳梁が増大、巻き数が増えて絶縁を強化、伝播を高速化しているのがわかった（2011）。これは脳の可塑性を実現するうえで重要なメカニズムと考えられた。【ミクログリア】の働きは2光子励起顕

微鏡の実現により21世紀に入って可視化され明らかになった。ミクログリアの表面

にはmajor histocompatibility complex（MHC）分子が発現しており、正常のシナプスに

は1時間に1回5分ほど接触して情報交換、損傷されていれば修復を行い、回復不能

な場合は細胞を貪食して脳神経細胞の除去を行う。容積が限られた脳内で高度の認識

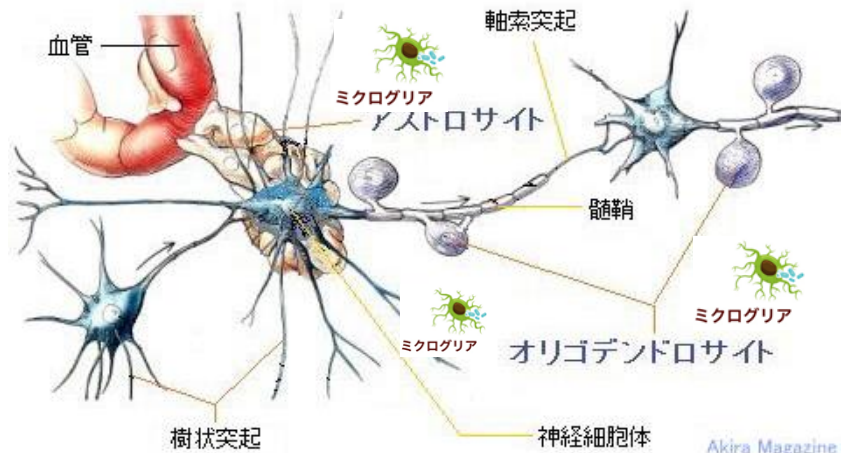
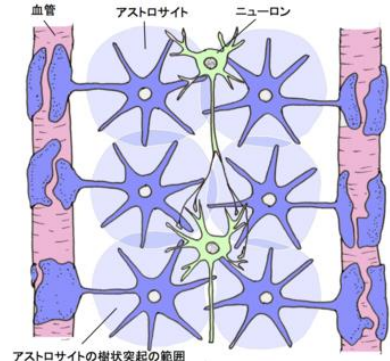
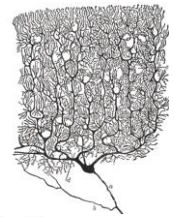
機能を備え、環境整備と清掃まで行うミクログリアの重要性が判明しつつある。

2光子励起顕微鏡：Maria Göppert-Mayerは博士論文（1931）で光子が非常に高密度になり2光子量が1つの空間を占めるとみなせるほど近づくと2光子は2倍のエネルギーを持った（=波長が1/2の）1光子に生まれ変わることを予測（1963ノーベル賞）。チタン-サファイヤ・レーザーでフェムト（ 10^{-15} ）秒単位の光線を反射鏡で収束させ $0.5\mu\text{m}$ 程度の空間内で2光子を融合させて1/2波長の光線のみに反応する蛍光物質を励起することができる。遠赤外線と1/2波長のフィルタを使い、頭蓋骨を薄く削れば1mm程度の深さの脳実質組織内を μm の分解能で走査して、生体の中樞神経細胞の形態変化を通常の生活をしたまま観察することができる（イオンなどの物質の追跡はマーカを使用）。



上段右の図はカハールによるニューロンのスケッチ。*1ゴルジとカハールは同年にノーベル賞を受賞したが受賞演説でゴルジは網状説、カハールはニューロン説を展開、電子顕微鏡の発達により神経接合部が明らかになりニューロン説が確定。*2カハールはミクログリアの存在を認めずオルテガを破門。

右写真写真はMaria Göppert-Mayer。



Akira Magazine